

# 通算20号

舞歌から探る彼我の異同 <後編> 安田登	2
和と洋の花開く街・奈良 <第2回> 荒井敦子	16
推奨するホンの一部 青木 健・甲田 烈・西田彰一・中島敬介	30
井上円了研究序説 —妖怪博士の奇想— 中島敬介 <第1回>	44
column 井上円了が発見した奈良(1) — 連座	56
SERIAL REPORT 第16回 飛鳥・奈良と『汎ユーラシアのイラン文化』 青木健	58
AN ORIGIN OF NARA'S CULTURE 杜園 岡本彰夫	64
INFORMATION 奈良県×陝西省 交流の軌跡 奈良県・中国陝西省友好提携10周年記念イベント紹介	28

EURO-NARASIA Q vol.20 2022年1月発行

企画・編集・制作・発行  
Planning/Editing/Production/Distribution  
奈良県立大学ユーラシア研究センター事務局 (編集責任者：中島敬介)

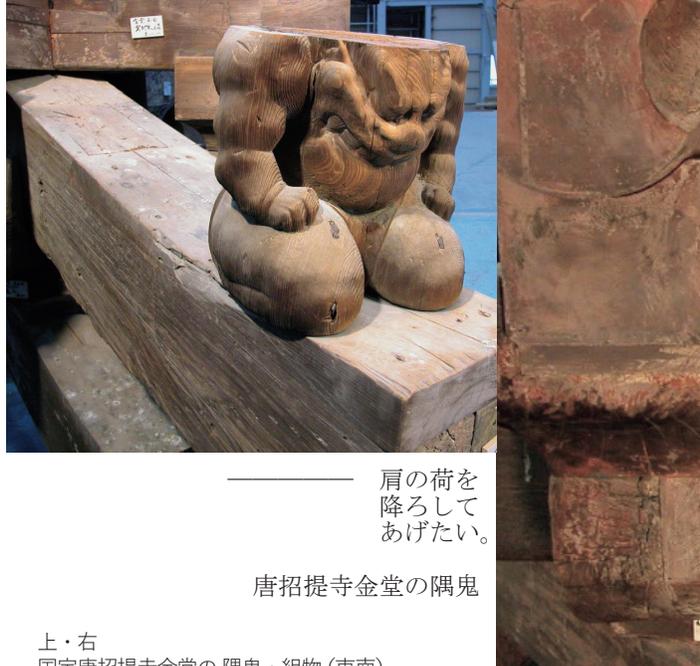
掲載写真のうち 表紙、裏表紙/事務局、P2、3、7-8、11-15/安田登氏、P18-21/荒井敦子氏、P28-29/奈良県国際課

印刷・製本  
Printing/Binding  
岡村印刷工業株式会社  
Printed in Japan

本誌掲載の写真、記事の無断転用を禁じます。  
Copyright©2022 Nara prefectual University. Allrights reserved.

本誌に掲載された記事・論文に関しては、所属団体や奈良県立大学等の公式的な見解を示すものではありません。  
The articles and essays published in this magazine constitute the opinions of their authors and editors and do not necessarily reflect the official opinions of the organizations to which the authors belong, nor those of Nara Prefectual University or any other associations and government bodies.

固有名詞や事実関係については、インタビュー・引用等においては、基本として発言や掲載内容に沿っています。  
本誌収録の写真等の著作人格権等につき、所在不明などのため事前連絡できないものがありました。お心当たりの方は本センター事務局(電話 0742-93-7245)までご連絡ください。



肩の荷を降ろしてあげたい。

唐招提寺金堂の隅鬼

上・右  
国宝唐招提寺金堂の隅鬼・組物(東南)  
保存修理事業記録写真(2002年より) 提供：奈良県文化財保存事務所



## 嫌われる人

『罵詈雑言辞典』という素敵な本がある。

唇を噛みしめる夜、一人の部屋には最適の一冊だ。強い酒が手元にあれば、なお良いであろう。表紙の「罵詈雑言」の4文字いや最初の2文字、歯をむき出したような冠をかしらに付けた罵と詈の字面だけで心が和む。それもそのはず、本来の「罵」は暴れ馬を静め、詈は言葉を封じる意味である。どうしたことが、二つ重なるという意味が「ののしり」に反転する。さらに重畳すると自重や深慮に戻るかというと、そうはならない。悪口や讒謗が加勢して一層の罵倒に向かう。

たとえば「津田左右吉氏の大逆思想」。昭和14年(1939)発行の「第一文献指摘」篇は本文18ページの小冊子だが、全編が罵詈雑言で覆い尽くされている。大逆だの抹殺だの放言だの凶逆不逞だの、「罵詈雑言辞典」にも載っていない悪態が、ご丁寧にも傍点付きで踊っている。津田左右吉の著作を「大胆不敵の暴悪妄断」による「神聖冒瀆滅却論」や「日本文化精神東洋文化抹殺論」と決めつけ、「国史上全く類例なき思想的大逆行行為」と絶叫する。「思想的大逆行行為」の語は「大逆的思想行為」とも変奏され、また題名に見るように単に「大逆思想」と略されて、津田の「罪」の深大さを顕示している。本来「大逆」とは主君や親を殺害する行為を言うが、戦前のこの国では特別な意味を持っていた。統治権の総覧者に危害を加える行為は「大逆罪」と規定され、未遂や計画でも一審のみで極刑となった。明治44年(1911)に処刑された幸徳秋水はジャーナリストや思想家としてよりも、その「犠牲者」として——その関連以外では、とんとお目にかかれないほど——有名である。

秋水非業の死から30年、蓑田胸喜は「大逆」という言葉で津田を罵倒した。公の立場の官憲でもないのに。「原理日本社」——急進的右翼結社と言われることが多い——を主宰する蓑田は、昭和10年(1935)に美濃部達吉を「天皇機関説事件」で葬り去ると、以後4年の間に当時の一流知識人を片っ端から薙ぎ倒し、両手に余るほどの首級をぶら下げて、記紀研究の碩学・津田に照準を定め、終には著書を発禁に追い込んだのである。

蓑田は——極右の思想家と言われがちだが——攻撃対象に左も右もなかった。津田を血祭りに上げると、次には後に東京裁判で唯一の民間人A級戦犯となる大川周明にも噛みついた。『日本二千八百年史』は「唯我独尊の徹底主観主義の史観思想法の誤謬」である、と。

蓑田胸喜という人は、いったい何に腹を立てているのだろう。名の胸喜の字音から「狂気」の陰口(悪口)をたたかれたが、詳細を読むと指摘は驚くほど論理的である。重箱の隅に些細な埃を見つけては針小棒大に喚き散らしているように見せて、実は生真面目な意図があったのかもしれない。他人の揚げ足取りなら揶揄や嘲弄はできても、こうまで激越な罵詈雑言は使えないはずだ。

私には2つの屈託を蓑田は抱えていたように思われる。1つは普遍性と特殊性、今風に言えばグローバルイズムとナショナリズムの問題。そしてもう一つ。知識人の言説に粉飾や欺瞞を嗅ぎ取っていたのではないか。

蓑田は昭和16年刊行の『學術維新』で、フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』を引用し、当今の学者・思想家・著述家は、現実との関係を無視し、ただ「思惟」の範囲に留まっていると——このときばかりは冷静な筆致で——指弾している。

私には聞き覚えのある懐かしい悪口だ。明治の思想家・井上円了は、世の学者を「自分の言っていることは高尚で、世間の人にわかつくがわかるまいが頓着しない、一人よがりだ」と吐き捨てた(詳しくは本文44ページ以降をご覧ください)。思えば円了も世間に嫌われた。その嫌われ方は蓑田と違っているが。当今一流知識人への批判。これが「嫌われる人」の共通項かもしれない。紙数が尽きたので、普遍性と特殊性の問題は次号に譲る。

一言だけ附記すれば、この問題意識も、井上円了と共通している。

文・中島敬介  
(次号に続く)